

## 【論文】

# 表象と欲動

——ラカンの視覚空間をめぐる——

工藤 顕太

## 1. 序文

本稿は、フランスの精神分析家ジャック・ラカン（1901 - 1981）が独自の仕方で開催した視覚空間をめぐる理論的なディスクールを検討する試みである。本稿はこの主題を、ジークムント・フロイト（1856 - 1939）の1920年代のテキスト、すなわち『快感原則の彼岸（*Jenseits des Lustprinzips*）』（1920）、『自我とエス（*Das Ich und das Es*）』（1923）の読解を経由することで考えてみたいと思う。ラカンは、ポスト・フロイト世代の分析家たちの間で多くの誤解と非難に晒され、場合によっては黙殺されもしたフロイトのこれらのテキストを忠実に読解し、そこで展開されるフロイトの思弁を正面から受け止めて精緻に理論化した稀有な後継者である。ラカンのテキストには、それが必ずしも明示的に示されていない場合であっても、フロイトのこれらのテキストへの参照がはっきりと見て取れる。したがって本稿が採用する方法は、精神分析史上におけるラカンの仕事の位置付けを考えれば必然的なものであると言えるだろう<sup>1</sup>。

ここに、本稿の構成について見取り図を示しておく。第1章では、「<私>の機能を形成するものとしての鏡像段階（*Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je*）」（1949）および「精神分析における攻撃性（*L'agressivité en psychanalyse*）」（1948）を可能な限り詳細に検討することで、ラカンにおける想像的なものと攻撃性の問題を析出し、そこでフロイトの欲動論がどのように応用されているのかを明確にする。第2章では、第1章での議論を土台としてフロイトのテキストを読解し、それらを貫く欲動・自我・対象といった精神分析の基本的主題を考察する。第3章では、ラカンの1964年のセミナーを編纂した『精神分析の四基本概念（*Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*）』（1973）を参照し、1960年代のラカンの視覚に関する理論において、1・2章で引き出された論点がどのように展開しているのかを確認する。

これらの作業を通して本稿が目指すのは、以下の二点である。第一に、フロイトとラカ

---

<sup>1</sup> 本稿における引用部分は、ラカンの著作については邦訳（1966=1972; 1966=1977; 1966=1981; 1973=2000）を参照した上で筆者が訳出したものを用い、フロイトの著作についてはちくま学芸文庫の中山元訳（1996）を用いた。

ンのテキストを相互に参照しながら読解し、それらの透徹した理解を提示する。そして第二に、ラカンの視覚に関する議論の展開が——何よりもフロイトの議論との関係において——持っている一貫性を明確化する。

## 2. 視覚空間と死の形象

### (1) 鏡像段階論

「<私>の機能を形成するものとしての鏡像段階」<sup>2</sup>において、ラカンは鏡像段階を、生後6カ月から18カ月の幼児に訪れる「ひとつの同一化 (une identification)」であると位置づける。この同一化は、「主体がある像を[自分のものとして]引き受けるとき自らに生ずる変形」と定義される<sup>3</sup> (Lacan 1966: 94)。主体は鏡に写った身体像に同一化することによって自らを変形する。それは鏡に写った自己の身体像を自分のものとして引き受けることによって初めて、主体が<私>を獲得するということである。本稿の議論にとってさしあたり重要なのは、鏡像段階が主体とその表象との間にあるきわめて特殊な関係を、視覚空間において提示しているということである。本節では、この特殊な関係が具体的には一体どのようなものかを明らかにすることを試みる。ラカンは主体と鏡像の関係を以下のように説明している。

それによって主体がひとつの幻影において潜在的な能力の成熟を先取りする、そのような身体の全体的形態は、ゲシュタルトとしてのみ、すなわち形態が構成されるものというよりむしろ構成するものであるような外在性においてのみ、主体に与えられるものだという事です。ですがこの形態は、主体がそれによって衝き動かされている諸運動の喧騒 (la turbulence de mouvements dont il s'éprouve l'animer) に反して、それ [=形態] を凝固させる等身大のレリーフのうちに、そしてそれを反転する対称性のもとで、主体に

---

<sup>2</sup> ラカンは初めて「鏡像段階」という言葉を用いたのは、1936年のフランス百科事典の「家族」という項目においてである。その後、鏡像段階論が体系的な理論として提示されるのは、1937年の国際精神分析学会での発表が最初であり、本稿で検討するテキストは1949年の同学会での発表をもとに書き起こされたものである。

<sup>3</sup> ここでまず確認されなければならないのは、この理論がすぐれて生物学的な発達段階をモチーフとして構想されている点である。それはこのテキストの中で、ラカンがチンパンジーやサル、ハトといった例を引き合いに出しながら、外部のイメージが生体の発達に及ぼす影響を論じ、ヒトという種における鏡像の特権的な機能を説明していることから明らかである。このことは、後のラカンの理論展開を踏まえれば若干の説明を要するだろう。よく知られているように、ラカンの仕事（少なくともその一部）の精神分析史上での位置づけは、フロイトの理論が持っていた生物学との照応関係を断ち切り、精神分析を徹底的に脱生物学化したことによって特徴づけられる。実際ラカンはここでの鏡像段階を主題とする議論も、1950年代、1960年代を経て生物学的次元からは明らかに切り離れたかたちで捉え直してゆくことになる。本稿ではラカンによるこうした捉え直し的一端を、第3章で取り上げる。

現れるでしょう。(Lacan 1966: 94)

ここには、鏡像が主体にとってどのようなものであるかが明確に示されている。ラカンは、主体を構成するものとしての鏡像に、ふたつの特性を見出している。それは主体に対して鏡像が持っている外在性と統一性である。鏡像は主体にとって外部に位置するものであり、それが主体にひとつの全体像を、つまり統一性＝単位 (*unité*) を与える。ラカンの考えによれば、こうした鏡像の本性は主体が〈私〉を獲得するための不可欠な条件であるが、しかしそれと同時に、主体を根源的に疎外するものでもある<sup>4</sup>。その意味で〈私〉の獲得とは主体にとって両価的な契機である。では、これらふたつの特性はいかなる仕方で主体を疎外するのだろうか。両者について順を追って確認しよう。

第一は、主体が鏡像として獲得する〈私〉のイマージュが、外部から与えられたものでしかないという点である。このことは、そもそも主体とは完全に自己同一的なものではありえないということを示唆している。主体はその起源からして、つねにあらかじめ自分以外のものを抱え込んだものとしてしかありえないのである。〈私〉ではないものに対する同一化を経て獲得される〈私〉。自らの根拠を最初から外部に奪われている〈私〉。このように、主体が不可避免的に疎外される在り方を指してラカンは「空間的な騙取 (*captation spatiale*)」と表現している (Lacan 1966: 96)。ここでの主体と鏡像との関係は、その空間的な距離によって特徴づけられる。なおかつこの距離は中立的なものではない。上の引用でラカンが「身体の全体的形態」が主体の能力の成熟を「先取りする」と述べていたことに目を向ければこのことは明らかである。ここで主体は、鏡像に対して根源的な遅れをとっているのである。この能力の成熟の先取りという観点からは、先に提示した鏡像の第二の特性である統一性に関わっている。それはどういうことだろうか。

主体を疎外する第二の要因は、主体が獲得する〈私〉のイマージュが、生体の運動性を奪うという点である。ラカンが上の引用で「主体がそれによって衝き動かされている諸運動の喧騒」と呼んでいたものは、この運動性のことを指している。ラカンはそれを、生体が有している生のエネルギーである「リビドーの力動 (*dynamisme libidinal*)」として捉えている (Lacan 1966: 94)。では、このリビドーの力動とはより具体的にはどのようなものなのだろうか。

先にも述べたように、鏡像段階とはもともと、極めて生物学的な問題をそのモチーフとしているものであった。ヒトの幼児は、その「出生時の特異な未熟性 (*prématuration spécifique de la naissance*)」ゆえに極めて神経的に未発達な状態を経由せざるをえず、生後の一定期間

---

<sup>4</sup> 以下で確認するように、ラカンは鏡像段階論から引き出される想像的なもの (*l'imaginaire*) をはっきりと主体の根源的な病理性と結び付けている。この病理性は「パラノイア的な自己疎外 (*aliénation paranoïaque*)」 (Lacan 1966: 96) と呼ばれるものである。ラカンは精神疾患を神経症・精神病・倒錯の三つに類型化しており、パラノイアはスキゾフレニー、メラニコリーと並んで精神病という類型の下位分類をなすものである。さらに補足すれば、神経症は脅迫とヒステリーという下位分類を持っている。

は内的な分裂、あるいは自己の内部と外部が相互に侵食し合うような不安定な状態が続くとされる。この状態は「原初的不調和 (une Discorde primordiale)」と呼ばれるものである (Lacan 1966: 96)。リビドーの力動とは、主体にこのような不調和をもたらすような拡散的なエネルギーのことである。主体が原初的不調和を脱するためには、このエネルギーをなんらかの仕方に取りまとめること、すなわち統一性＝単位を獲得することが必要となる。主体が<私>を獲得するために、外部のイマージュの引き受けが特権的な意義を持つことは、こうした生物学的な（あるいは神経学的な）事情に起因するのである。

以上で確認された主体と鏡像との関係を整理しておこう。主体にとって鏡像は外在性・統一性というふたつの点で特権的な表象である。これらの特性において、主体と鏡像は<私>/<私>でないもの、動的なエネルギー／静的な全体像という対照的な関係にある。この関係において主体は、権利上自身の固有性とは何の結びつきも持たない外部の表象を自己同一性の中心に据え、その表象によって自身が有していた運動性を奪われるという二重の仕方疎外される。この意味で鏡像は主体にとって一貫して両価的なものである。このような整理を踏まえると、鏡像が持っている主体を疎外するふたつの特性は、本稿にとって重要な論点へとつながっていることが明らかになる。この点を明確にするために、主体と鏡像の関係を説明するラカンの言葉をもう少し追うことにしよう。

ラカンは原初的不調和を体現するものとして、「寸断された身体 (corps morcelé)」というイマージュを提起する (Lacan 1966: 97)。この分裂的でカオティックでさえある不定形の生のエネルギーは、表象によって整流化され、ゲシュタルトによって一つの全体へと、安定した統一的イマージュへと凝固されなければならない。ラカンはこの過程を以下のように語っている。

鏡像段階は、その内的な昂進が不充足＝無能力 (insuffisance) から先取りへと急進するひとつのドラマ——それは主体 (空間的同一化という罫 (leurre) に捕えられた主体) にとって、身体の寸断されたイマージュから整形外科的 (orthopédique) と私たちが呼ぶ全体性の形態へと継起するファンタスムを組み上げるものです——であり、自己疎外的な同一性 (une identité aliénante) という鎧が引き受けられるに至って、それが精神発達全体に硬直した構造という刻印を押すこととなります。 (Lacan 1966: 97)

鏡像は「整形外科的な」矯正を主体に加え、「自己疎外的な同一性」を与える。そこでなされるのは寸断された身体から統一された<私>へと移行する、イマージュの水準での主体の変形なのである。「同一化という罫」「ファンタスム」という言葉でラカンが語っているのは、この変形が主体を現実の生の水準から引き離すものだということである。本稿が重視するのは、ここで現実の生の水準とイマージュの水準が相互に連動しながらも別々に存在しているということである。この水準の区分は、鏡像が主体にもたらす二重の疎外が交差する点を示唆している。イマージュの水準は、現実の生の水準から切り離されてしま

えば、主体に固有な生の純粋な外部へと通じている。そこで主体が引き受ける全体像は、動的な生のエネルギーの対極というべきものである。端的に言おう、外在性と統一性による主体の疎外の基礎にあるのは、死ではないだろうか。

鏡像段階は主体を「虚像の系列の中に位置づけること」であり、この過程で主体は「自動人形 (automate) と一体化する」(Lacan 1966: 95)。「私」が「私」になること、それは、「私」が一つの全体としての「私」という形式において規格化されることに他ならないのである。この形式は、それ自体としては中身のない空虚な容器であり、表層的な影にすぎないものである。原初的不調和に解決をもたらすのは、熱もなければ匂いもしない平板な表象なのであって、そこにははっきりと死の形象が立ち現れているのである<sup>5</sup>。

ラカンの以上の議論を踏まえて、本稿はここから、主体と鏡像の関係を生物学的な発達段階の一局面に留めることなく、精神分析のディスクールとしてより広い布置において捉えることを試みる。そのために、少々先取りして、フロイトの欲動論とラカンの鏡像段階論を接続するための最低限の確認をしておきたい。両者を接続する第一のポイントとなるのは、先に確認したリビドーの拡散的な性質である。鏡像段階論におけるリビドーと原初的不調和というラカンの見立てで前提とされているのは、フロイトが提示した部分欲動として性欲動 (=リビドー) である。フロイトの考えによれば、性欲動は身体の個々の部分としての性感帯から発生するものであり、それらは本来的にひとつの全体としてはありえない。したがって、生体はそれら複数の部分欲動の束として考えられなければならない。それらの拡散を抑圧し統合するのが自我 (Ich, moi) という審級なのである。鏡像段階において獲得される「私」とは、性欲動に仮の統一性を与える審級としての自我に他ならない。この意味で鏡像段階論は、自我における欲動の統合の契機を、視覚空間における「私」のイマージュの獲得の場面として提示する理論であると言えるだろう。

## (2) 想像的なものと攻撃性

前節では、鏡像の外在性・統一性によって主体における自我の獲得と疎外がもたらされること、そしてそこには生と死の対立という契機が潜在的に含まれていることを確認した。本節では、フロイトの欲動論とラカンの鏡像段階論を結びつける第二のポイントとして、「攻撃性 (Agression, agressivité)」の問題を取り上げる。ラカンにおいて攻撃性は、前節で確認した鏡像による主体の能力の成熟の先取りによる必然的な帰結として位置づけられている。それは主体にとって鏡像が両価的なものであるために、主体が抱かざるをえない情動なのである。「私」と、「私」であって「私」ではない、むしろ「私」の死を写し込んでいる表象との捻じれた関係は、主体の攻撃性を喚起せずにはおかない。鏡像による成熟の先取り、すなわち主体が鏡像に対してとっている遅れは、「私」が「私」である根拠が

---

<sup>5</sup> 私たちは第2章以降で再びこの点に立ち返る。鏡像段階が孕んでいるこのような死の契機は、フロイトから引き継がれた死の問題系、より具体的にはフロイトが『快感原則の彼岸』で導入した死の欲動の位置づけとの関係において考察する。

つねにあらかじめ鏡の向こう側に奪われていることを意味する。ラカンはこのことを、主体が被る「最初の捕捉 (une première captation)」と呼んでいる (Lacan 1966: 112)。そしてこの捕捉のために、主体は鏡像に対して「原初的な嫉妬」を抱くとされている (Lacan 1966: 113)。ラカンはここに攻撃性を見出し、「精神分析における攻撃性」で以下のように述べている。

私が鏡像段階と呼んだものは、主体がそれを通して自らを自身の身体の視覚的<ゲシュタルト>と根源的に同一視する、情動的な活力を発現するという意味を持ちます。このゲシュタルトは、主体の運動性 (motricité) がまだはなはだしい不調和にある状態との関係によって、理想的な統一性、救いのイマージョとなるのです。(中略) まさにこの人体のイマージョによる捕捉こそが、幼児の最初の時期ではそれが欠如していることを誰もがはっきり示している感情移入以上に、六カ月から二歳半の間で、自分の同類を前にした幼児の振る舞いのあらゆる論理 (dialectique) を支配しているのです。(中略) そこにある種の構造的な岐路があって、人間における攻撃性という本性、およびそれと自我と諸対象というフォルマリズム (formalisme) との関係を理解するためには、その岐路において私たちの思考を調節しなければなりません。人間の個体が、彼を自身から疎隔してしまうひとつのイマージュに固着するこのエロスの関係こそが、エネルギーであり、また個体が<私 (moi)>と呼ぶことになる受難=熱情の組織化=器官化 (organisation passionnelle) がその起源としている形式 (forme) なのです<sup>6</sup>。(Lacan 1966: 113)

ラカンがここで提示する論点を整理してみよう。鏡像段階は、<私>とその「同類」との、つまり同じ水準に属する他者との情動的な関係を基礎づけ、私たちが同類の者に差し向ける感情移入の回路の原型を用意するものである。しかし前章で検討したように、鏡像は主体にとって両価的なものである。「寸断された身体」を統一された<私>へと結び合わせる「救いのイマージョ」は、しかし同時に主体の自己同一性の根拠を奪い、それによって攻撃性を喚起するものでもある。したがって<私>=自我と他者=対象 (objet) との関係は、その本性として攻撃性を孕んでしまうことになるのである。ラカンはここで、主体と鏡像の関係の核として、自我と対象との関係に焦点を当てている。ラカンが攻撃性の起源として重視するのは、両者の間にある「固着」と「疎隔」という矛盾するベクトルである。それがフォルマリズムと呼ばれるのは、自我と対象との緊張関係そのもの、あるいはそうした緊張関係のものにある対称的な構造こそが、自我を構成するからである。つまり、自我とは自律的に生成するものではなく対象との緊張関係の効果として成立する審級であり、そ

---

<sup>6</sup> ここで自我の成立を「組織化=器官化」と訳すのは、自我における部分欲動の統合という論点が、のちにラカンによって、器官——ただしそれは形式的な概念装置としての器官なのだ——すなわちファルスの欠如というかたちで引き継がれることを考慮してのことである。本稿ではラカンのファルスに関する議論を第3章で取り上げる。

うした審級を宿しているがゆえに、主体は攻撃性を内在化させることになるのである<sup>7</sup>。

自我と対象という二者の緊張関係、「双数的=決闘的 (duel)」関係は、想像的なもの (l'imaginaire) と呼ばれる領域の原理である (Lacan 1966: 58)。鏡像段階とはこの意味で、ラカンが想像的なものとして理論化する問題系のプロトタイプであると言える。しかしここでは、この問題系に直接立ち入ることはせず、精神分析における対象という観点からここまでの議論を概括する。そのために再び先取りをしてフロイトの議論を参照し、本稿の議論にとって重要な論点を引き出しておきたい。フロイトにおいて、対象が明確に概念化されるのは欲動 (Trieb) を構成する四要素のひとつとしてである。この四要素は「欲動とその運命 (Trieb und Triebchicksale)」(1915=1996) で提示されるもので、欲動の衝迫 (Drang)・目標 (Ziel)・対象 (objekt)・源泉 (Quelle) のことを指している<sup>8</sup> (Freud 1915=1996: 18)。欲動の対象について、フロイトはこの論考で以下のように説明している。

欲動の〈対象〉とは、欲動がその目標を達成することができる対象または手段である。これは欲動にとっては非常に変動しやすいものであり、本来は欲動と結びついているものではなく、満足をもたらす上で適切なものであるために利用されるにすぎない。欲動の対象は必ずしも外的な事物ではなく、自己の身体の一部である場合もある。欲動が存在している間に経験する〈運命〉において、対象は任意に、かつ頻繁に取り替えられることがある。(Freud 1915=1996: 19)

ここでフロイトが述べているのは、欲動の対象はその可変性・互換性によって特徴づけられる、ということである。つまり、欲動とはそもそもその対象に向けられてあるものではなく、むしろ個々の源泉と結びついた満足为目标としており、対象はその過程で任意に選択されるにすぎないのである。それはまた、主体にとって外部に存在している場合もあ

---

<sup>7</sup> ラカンは攻撃性を以下のように定義している。「攻撃性とは、われわれがナルシズム的と呼ぶ同一化作用の様態と相関的な動向である。この様態は、人間の自我と人間の世界に特有のさまざまな本質的領野の、明確な構造を規定している」(Lacan 1966: 110)。攻撃性を喚起する二者の関係は、決して幼児に、あるいは人間形成のある段階に限定されるものではないということには注意を向けるべきである。それは自我=〈私〉と不可分な「明確な構造」であり、人間に特有の本質的領野を規定するものだとラカン自身がはっきり述べていることは、鏡像段階論を幼児期の発達段階に限定されない広い文脈で捉え直そうとする本稿の議論にとって大きな意義を持っていると言える。

<sup>8</sup> ここで欲動と、その四要素の定義および関係を簡単に確認しておく。フロイトは欲動を身体的なものと精神的なもの境界に位置するものであるとしている。衝迫は、欲動の持っている力動的な側面、つまり欲動が有している突き動かすエネルギーそのものを指している。これは心的装置において内的な刺激、すなわち不快な緊張として感知されるため、主体は快感原則に従ってこの不快を解消すべく、この欲動の満足为目标とする。この満足のための手段として選択されるのが対象である。源泉とは特定の身体器官のことであり、例えば性欲動における性感帯はこの源泉に当たる。

れば、主体の「自己の身体の一部」でもありうる。こうした観点は、鏡像段階論から引き出される攻撃性に関する議論を捉え直す際に有用なものである。先に鏡像段階を想像的なもののプロトタイプであると述べたが、それを上の観点から換言すればこうなるだろう。すなわち、鏡像段階とは、主体と対象との関係を想像的な次元において提示するモデルである、と。なぜなら、主体が自己疎外と不可分な仕方<sup>1</sup>で獲得する〈私〉のイマージュとは、自我の成立のプロセスにおける欲動の対象に他ならないからである。しかし、鏡像段階における対象の位置というものを考えた場合、そこにはある構造的な複雑さが見出されることになる。それはどういうことだろうか。

このことを明確にするためには、やや素朴な問いを発する必要がある。その問いとは以下のようなものである。鏡像段階において、欲動の対象となっている統一的な自己のイマージュとは、鏡像そのものなのだろうか。言い換えれば、それは鏡像の側にあるのだろうか、それとも鏡像を前にして歓喜する主体の側にあるのだろうか。実はこれまでの議論で、この問いの答えはすでに明らかになっている。この対象は鏡像の側と主体の側のどちらにも位置づけられないのである。これは前節で取り上げた鏡像の外在性と統一性から直結する論点である。すでに述べたように、主体は鏡像に対して遅れをとっており、その自己同一性の根拠を鏡像に奪われているために、攻撃性を喚起される。その攻撃性は、主体と鏡像の間で自我と対象というフォルマリズムが成り立つことによって生じるものである。つまり、主体は鏡像との間で決定的な隔差を抱え込んでおり、この隔差においてしか対象としてのイマージュ、すなわち自我は与えられない。言い換えれば、主体と鏡像との間で自我 - 対象はひとつの緊張関係として位置づけられるものである。そして主体と鏡像の両面的な関係において、あるいは固着と疎隔という矛盾するベクトルにおいて、自我と対象という二項は相互に反転しながらひとつの組織=器官として機能する。その過程にある主体の自己疎外の根底に死の契機が潜在していることはすでにみた通りである。対象としての自我 (moi) は、〈私 (moi)〉において〈私 (Je)〉が死の形象を纏い失われるところ<sup>2</sup>にしか現れない。このような特異な対象との想像的關係を経ることで、主体は自らの部分欲動を、錯覚的な自己のイマージュとしての自我のもとに組織化=器官化する。次章では、こうした自我の成立過程に、フロイトの欲動論を検討することで別の角度から光を当ててみたい。

### 3. 反転する欲動・自我・対象

#### (1) 第二局所論における攻撃性

本稿はここから、前章で検討した鏡像段階から析出される想像的なもの、攻撃性といったテーマ系を、フロイトの欲動論から捉え直すことを試みる。そこでまず、これらのテーマ系を完結に示した、有名なシェーマを取り上げておこう。



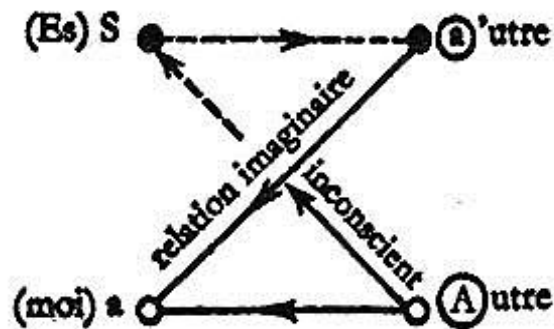


図1 シェーマLの模式図 (Lacan 1966: 53 より抜粋)

このシェーマLは、ラカンが象徴的なもの (le symbolique) と想像的なものの関係を、鏡像段階の議論と接続しながら解説するのに用いたものである (Lacan 1966: 53)。この図ではフロイトのいわゆる第二局所論が前提とされている。前章で主題化された、主体と鏡像の間の対象関係、あるいは自我の審級が孕む分裂は、図の中の a (自我) と@a'utre (他者) の間の想像的關係 (relation imaginaire) に対応している。この想像的關係に遮断されるかたちで、主体 (S) と<他者 (A'utre)>、すなわち象徴的なものの関係は無意識の領域に留まっている<sup>9</sup>。ここでさしあたり重要なのは、ラカンが (無意識の) 主体をフロイトが第二局所論で用いたエス (Es) の審級と同一視していることである。本稿がフロイトの欲動論を検討するにあたって出発点とするのは、このエスという審級が自我の成立においてどのように関与するのか、そして攻撃性や欲動の統合がそこでどのように位置づけられるのか、という問いである。

フロイトの第二局所論において、エスは何よりも無意識そのもの、あるいは無意識の欲動がそのエネルギーを保持している場として捉えられている。エスはそこで、主体における最も根源的な次元として構想されており、それを受けて自我は「エスが特別に差異化された部分にすぎない」と定義される (Freud 1923=1996: 243)。こうしたエスの根源的な位置づけは、超自我 (Über-Ich) の定義にも及んでいる。フロイトは超自我を、「自我に対してエスの代理人として行動できる」審級と定義している (Freud 1923=1996: 257)。このように、第二局所論における三つの審級は、エスを中心として他のふたつがそこから分化しそれぞれの機能を果たす、という関係にある。しかしそれにもかかわらず、自我はそのなかで深刻な葛藤のうちに身を置いている。したがって第二局所論の成り立ちを捉えるためには、あくまでエスの一義性を視野に収めつつ、自我がそこに身をさらしている対立関係を解きほぐさなければならないのである。本稿ではまず、この対立関係が明確に現れる地点、すなわち超自我が生成し自我に対して過酷な命令を下すようになる地点へと向かって議論をすすめてゆきたい。

<sup>9</sup> 象徴的なもの、<他者>に関しては第3章で取り上げる。

それはフロイトがその理論的変遷の中で示したふたつの「道徳の系譜」が合流する地点である。フロイトが示す第一の系譜は、エディプス・コンプレックスにおける父親との葛藤を経た同一化の機制である。フロイトは『自我とエス』において、「超自我は父のモデルとの同一化によって生じたものである」と明確に規定する (Freud 1923=1996: 266)。つまり、子どもに対して厳格な禁止の命令を下す存在としての父親が、超越的なものとして自我の内部に取り込まれた結果、それがモデルとなって超自我という法的審級が成立するのである。この審級は自我にとって道徳を体現し、自我がいかにあるべきかを決定するものである。その際、父の形象は自我に対して二重の仕方で現れることになる。フロイトは以下のように述べている。

自我に対する超自我の関係は、「おまえは (父のように) あらねばならない」という関係に尽きるのではなく、「おまえは (父のように) あってはならない」という禁止、すなわち、「父のすることすべてを行ってはならない」という禁止を含むものである。自我には多くのことが禁止されたままなのである。(Freud 1923=1996: 236)

<父のようになること／ならないこと>という、相反する命令を同時に下されることで、自我は必然的に引き裂かれることとなる。この不可能な命令は、「自我理想のくふたつの顔」と言い換えられ、自我はそれを強い罪悪感として、あるいは不安として経験する<sup>10</sup> (Freud 1923=1996: 237)。この不安は「去勢不安」である (Freud 1923=1996: 270)。エディプス・コンプレックスはこのような分裂を介して自我のうちに父親の機能を取り込み、超自我はその効果として形成されるのである。

しかし、超自我の発生源はこれだけに特定されるわけではない。フロイトは同じ『自我とエス』において、『快感原則の彼岸』から導入された死の欲動 (Todestrieb) に、より正確にはそれが有している攻撃性の側面に超自我のもうひとつの発生源を見出している。先に述べた「エスの代理人としての超自我」という在り方に直接結びつくのはこの系譜である。こちらのラインでは、「道徳の系譜」上に位置づけられる超自我は破壊欲動やサディズムと、つまりこう言ってよければ、道徳や法とは対局にあると通常想定されるような、暴力的なエネルギーと結び合わされることとなる。それはどういうことだろうか。フロイトはメラ

---

<sup>10</sup> フロイトは超自我・自我理想 (Ich-ideal)・理想自我 (Idealich) という概念を必ずしも明確に使い分けてはいない。ここで本稿がこれらの概念区分をどのように考えるかを提示しておく。超自我が自我に対して過酷な命令を下す審級であることはすでにみたが、自我理想はその命令において自我のあるべき規範を体現するものであると考えることができる。エディプス・コンプレックスから流れ込む超自我の苛烈さは、両立不可能な規範としての自我理想を同時に押し付けることに由来する。これに対し理想自我は、いわば自我の側からそうなりたいと願う理想のイマージュであり、鏡像段階において自我の欲動が対象とするのはこの理想自我として捉えられる。そしてこの後の私たちの議論は、フロイトの概念が有している曖昧さを引き受けたうえで、それらの複合的な関係からラカンのディスクールを理解する手がかりを引き出す試みである。

ンコリーにおける超自我と自我の関係を例に取りながら、以下のように述べる。

過度なまでに強い超自我は、意識を独占し、容赦のない厳しさ自我を脅す。まるで超自我は、個人の中であらんかぎりのサディズムを発揮するかのようである。サディズムの理論によると、破壊的な要素が超自我の中に沈殿し、自我に向けて使用されるかのようである。いまや超自我の中で支配しているのは純粹培養された死の欲動である。(Freud 1923=1996: 264)

ここでフロイトが論じているのは、超自我が自我に対して行使する攻撃性についてである。この攻撃性は道徳的命令の過剰な厳格さとして現れるものだが、それを司っているのは死の欲動であるとされている。「超自我の中で支配しているのは純粹培養された死の欲動である」。多少なりとも驚くべきこの指摘は、どのように受け取られるべきだろうか。このことを考えるためには、そもそも死の欲動とはいかなるものなのかを明確にしておく必要がある。

よく知られるように、フロイトが一貫して依拠する欲動の対立という考え方において、その比重は自我欲動 (Ich-Triebe) / 性欲動 (Sexualtrieb) の二元論から死の欲動 / 生の欲動 (Lebentrieb) の二元論へと移行する。この移行は、自我自身を性欲動の対象とするナルシシズムという在り方への着目によって、前者の二元論があらゆる場合に十全に機能するものではなくなったことに端を発している (Freud 1920=1996: 182)。そこでフロイトは、自我欲動 / 性欲動という対立に、死の欲動 / 生の欲動という対立を塗り重ねて思弁するという戦略をとる。「塗り重ねて思弁する」というやや不明瞭な表現は、後者の対立の導入によって、前者の対立が完全に手放されたわけではなく、場合によって自我欲動と死の欲動を、そして性欲動と性の欲動とを同一視しながらフロイトが理論展開をはかったということを意味している (Freud 1920=1996: 183)。したがって本稿も、こうしたフロイトの理論展開に則り、上のふたつの二元論を併用することになる。ここで確認されるべきことは、フロイトがこれらの二元論を用いるにあたって、個々の欲動に固有の本質よりもむしろ、それらが一組の対立関係を構成していることそれ自体を重視していた、ということである<sup>11</sup>。

超自我の第二の発生源を考える上で、死の欲動 / 生の欲動の二元論は重要な意義を持っている。なぜなら、死の欲動の攻撃的な側面は、生の欲動との絡み合いによってこそ生じるものだからである。「死の欲動は基本的に<無口>であり、生の<騒音>の多くはエロスから生み出されているという印象を否みがたい」とフロイトは言う (Freud 1923=1996: 254)。

---

<sup>11</sup> それゆえ本稿では、自我欲動と死の欲動、性欲動と生の欲動の概念上の区別を厳密にすることはしない。自我欲動 - 死の欲動 (タナトス) / 性欲動 - 生の欲動 (エロス) という、フロイトが用いた (いわば二重化された) 二元的対立を前提としたうえで、例えば死の欲動との対立関係が論点となる場合には生の欲動に、性欲動との対立関係が論点となる場合には自我欲動に焦点を当てる、といった仕方で議論を組み立てることを、本稿の基本的な方針として示しておく。

つまり、死の欲動はその本性からすれば、騒々しい生の欲動とは対照的に、むしろエスという無意識の場において沈黙する欲動として捉えられるものなのである。では、その沈黙はいかにして破られ、その破壊的な側面を前景化させるのだろうか。フロイトは上で引用した箇所が付された注においてこう答えている。「破壊欲動は、エロスの媒介によって、本来の自己から外界へと向きを変えられたものであると考えられる」(Freud 1923=1996: 254)。つまり、死の欲動は本来的には静的に駆動するものでありながら、エロス=生の欲動と協働し外部の対象に向けられたとき、攻撃性に転化するとされているということである。死の欲動という概念の捉え難さは、まさにこの両義性にこそ、あるいは矛盾にこそ存していると言っていいただろう。欲動とは生体において恒常的に働いているエネルギーであるが、それにもかかわらず、死の欲動はそのうちにはっきりと潜在的な次元を含んでいる。そしてそうでありながら、それが顕在化したときには、この上なく饒舌な力として攻撃性を発揮するのである。

死の欲動が潜在的に有しているこうした攻撃性をフロイトはサディズムと呼び、このサディズムが性欲動に「進むべき道を示し」、それによって性欲動は対象に向かうとしている(Freud 1920=1996: 185)。ここに見出される死の欲動の攻撃性と対象関係との交錯は、本稿の理路にとって極めて重要な意義を持つものである。なぜなら、以下でみるように、フロイトの考えによれば超自我が自我に対して行使する攻撃性とは、生の欲動と連動することで(主体の)外部の対象へと向けられた死の欲動が、自我-対象の反転という契機を経て、自我をその対象として方向転換してきたものだからである。ここには、前章の議論から引き出された鏡像段階における攻撃性、相互に反転する自我-対象というフォルマリズム、といった論点が、別のかたちで見出されるのである<sup>12</sup>。

したがって、死の欲動の特性は以下のように整理できる。第一に、本来的には沈黙する欲動であること。第二に、生の欲動との連動によって攻撃性に転化すること。第三に、対象との関係において、性欲動を先導する機能を有すること。これを踏まえれば、超自我の位置づけはさらに明確なものとなるだろう。この議論の出発点となった問いは、超自我が「純粹培養された死の欲動」の支配によって自我を責め立てるとはどういうことか、というものであった。超自我が攻撃性対象を自我に差し替えるのは、自我がエスから沸き立つ欲動を抑圧し断念させたときである、とフロイトは考える。ここで言う欲動の断念とは、エスに沈潜するエネルギーである死の欲動が、生の欲動と絡み合い外部の対象に向けて発揮する攻撃性を、自我が制限する契機のことである。重要なことは、他ならぬ超自我からの道徳的命令に従って、自我はこうした制限を行う、ということである。この契機についてフロイトは以下のように述べている。

欲動の制限、すなわち道徳性という観点からは、エスはまったく無道徳であり、自我は道徳であろうと努力し、超自我は過度に道徳的で、エスのように残酷になりうる。人が

---

<sup>12</sup> この論点に関しては次節以降で再度立ち戻り、検討する。

外部への攻撃性を制限すればするほど、自我理想においては厳格で、自己に対しては攻撃的になりうるのは注目に値する。普通の考えでは逆に、自我理想が定める基準が、攻撃を抑制する動機となると想定している。しかし事實は、すでに述べたとおりである。人間が自らの攻撃性を制限すればするほど、自我に対する理想の攻撃傾向は昂進するのである。あたかも自己の自我への置換、方向転換が行われているようである。(Freud 1923=1996: 265-266)

この記述は、「エスの代理人」という超自我のステータスがどのような事態によって支えられているのかを明確に説明している。自我が何よりも超自我への配慮から道徳的であるために制限した攻撃性は、他ならぬ超自我によって、自我へと跳ね返されることとなる。自我がエス（における欲動）の発する攻撃性を制限すればするほど、その制限を強いる道徳的サディストたる超自我は一層苛烈に自我を攻撃するのである。その意味で攻撃性の制限とは、攻撃性を自我自身へと「方向転換」すること、あるいは超自我の命令を介することで自我自身を対象に差し替えることに等しい。つまり、超自我とは自我がエスに対して行使する抑圧の裏返し以外の何物でもないのである。繰り返しになるが、この抑圧を要請するのもまた超自我による道徳的命令であって、この再帰的構造は自我がつねにあらかじめ閉塞の中にしか、あるいはひとつの分裂としてしかありえないものであることを示しているのである。

## （２）想像的自我と死の欲動

前節では、フロイトの第二局所論とそこでの欲動の働きを検討した。この検討で引き出された論点を今一度整理しておく。まず、フロイトの欲動論の捉え難さの由来について、本稿が取り扱ったものに限定すれば大きく分けて二点挙げることができる。そしてそれらは同じひとつの問いに結び合わされるものである。

一点目は、死の欲動と生の欲動が連動している段階において、その攻撃性の対象が超自我を経由して——いわば必然的に——自我に転化する構造の問題である。自我と超自我は、エスから派生する、あるいはそれを代理するという意味でその出自を同じくしていながら、なぜそのような葛藤へと導かれるのだろうか。そのような葛藤を生み出すエス、ないしそこで別のものと想定されている死の欲動と生の欲動の関係はいかなるものなのだろうか。

二点目は、すでに述べたように、死の欲動が孕んでいる二重性（すなわちエスにおいて沈黙している潜在的な段階と、生の欲動と連動し攻撃性を顕在化させる段階）に関するものである。これを単純な問いに変換すればこうなる。すなわち、沈黙している段階において、死の欲動はいかにしてその存在を想定されているのだろうか。そしてこの問いは必然的に、それらがエスに内在化されている次元において、死の欲動と生の欲動とはいかに区別されうるのか、という問いへと結びつく。

このように考えれば、フロイトの欲動論に関する本稿の検討によって導き出される本質

的な問題は、死の欲動と生の欲動の関係、およびそれが自我にもたらすとされる葛藤をどのように把握すべきか、ということをおいて他にないと言えるだろう<sup>13</sup>。前節までの議論でみてきたように、自我とは、いわばエスに貯蔵された欲動がもたらす葛藤が表現される場そのものである。自我における葛藤は、前章の議論では、主体と鏡像の間で——ラカンがフォルマリズムと呼ぶ——自我 - 対象という緊張関係が喚起する攻撃性として捉えられた。そして前節では、まさしくこのフォルマリズムに起因する攻撃性という論点が、フロイトの第二局所論においても形を変えて見出された。このように、自我 - 対象というフォルマリズムがもたらす攻撃性という論点は、本稿が鏡像段階論と第二局所論を接続する際の結節点となるものである。したがってここではこの論点から、先に示したフロイトの欲動論を捉えがたいものになっている問題を考え、想像的なものに関する議論のなかにそれらを位置づけ直すことを試みる。

前章の議論で、本稿は鏡像段階における自我 - 対象がひとつの緊張関係において、相互に反転可能なものとして機能することを指摘した。このことは、フロイトの欲動論に見出される困難として先に示した一点目の問題に対応するものとして捉え直すことができる。その問題とはすなわち、欲動の攻撃性の対象が超自我を経由して必然的に自我に転化する構造に関するものである。この構造において、攻撃性の対象として自我を設定するのは自我自身である。厳密に言えば、エスとその代理人としての超自我との間で板挟みにされることによって、あるいはその板挟みのうちにしか自らの場を持つことができないという本性的な条件によって、自我は自身を欲動の攻撃性の対象として差し出すようにあらかじめ設定されている。そこでは欲動を抑圧する自我と攻撃性の対象となる自我が同時に生起する。このような自我の分裂は、本稿の理路からすれば、鏡像段階における主体と鏡像の間

---

<sup>13</sup> この問題はフロイト理論が孕んでいるきわめて一般的な困難と関わっているように思われる。ここで少々迂回してこの困難がいかなるものかを素描しておく。この困難は、フロイトにおいて、質的に異なる複数の審級からなる局所論と、その増減を原理とするような量的なエネルギーを想定する経済論とが、組み合わせあって同時に用いられることに由来するものであるように思われる。フロイトの欲動論は一貫して、快感原則がその典型を示すような物理的なエネルギーモデルを採用している。それは、計量可能なエネルギーの増減という軸を持っているという意味では一元論的な思考であると言える。しかしそれと同時に、フロイトは質的に対立する審級を想定することを、つまり自我を二元論的に思考することをやめない。前節で確認したように、欲動の対立という考え方をフロイトが一貫して重視していたことから、このことは明らかである。それは、自我というものはつねにあらかじめ何らかの葛藤のもとにある、という前提が、精神分析理論全体を支えているからである。このような見立てからすれば、例えばフロイト理論を基礎づける抑圧されたものの回帰という神経症のメカニズムは、いわば一元論と二元論のハイブリッドにおいて自我が課せられている葛藤を端的に表現していると言える。つまり、抑圧があるということは対立する別々の審級が想定されることを、抑圧されたものが回帰するということはその背後にある恒常的なエネルギーが想定されることを意味する、ということである。慣性を有した恒常的なエネルギーによってこそ——制御されたエスの攻撃性が超自我という別の審級へといわば持ち越され——、自我はエスと超自我との間で不可避的な分裂を被るのである。

の隔差の相関物である自我 - 対象の緊張関係と同一のものなのである。したがって、第二局所論で自我が抱えている構造的な閉塞は、鏡像段階がそのプロトタイプである想像的關係、すなわち双数的=決闘的關係におけるそれと相同的であると言える。

では、フロイトの第二局所論における自我がラカンの想像的な自我 - 対象と一致しているとすれば、鏡像段階における部分欲動としての性欲動の（仮の）統合という契機とフロイトの欲動論はどのような関係にあると考えられるのだろうか。すでに述べたように、フロイトが常に欲動の対立という二元論的構図そのものを重視している以上、イメージの水準における欲動の統合という契機もまた、この構図のなかで考えられなければならない。ここで、本節の冒頭に提示したフロイトの欲動論が抱える困難の二点目、すなわち沈黙する死の欲動の存在、あるいは死の欲動の生の欲動からの厳密な区別についての疑念へと立ち返る必要がある。

一点目の困難に関する上の整理が欲動の攻撃性を、つまり死の欲動と生の欲動が連動している段階を前提としている以上、これらふたつの欲動は権利上同一のものに留まったままになっている。したがってこの議論を前進させるためには、鏡像段階論との対応関係において改めて死の欲動と生の欲動の区別を可能にする条件を主題化する必要がある。それは、死の欲動が沈黙している段階を想像的な自我の成立というパースペクティブから検討する作業である。

繰り返しになるが、鏡像段階とは部分欲動としての性欲動が、想像的自我というイメージによってひとつの身体に統合される契機である。もちろんこれは、部分欲動が完全な統一性のもとに全体化するということを意味するのではない。部分欲動がそれぞれの源泉と目標を持っている以上、それらが完全に統合されることは原理的にありえないからである。重要なのは、こうした本来的な非一体性にもかかわらず、性欲動ないし生の欲動がひとつの身体イメージによって取りまとめられることを可能にする条件を明らかにすることである。ここで問題になっているのは、性欲動を司る機能としての器官——それは必ずしも文字通りの生体的な器官でなくてもよい——の単位=統一性である。そして、これまでの議論から、性欲動 - 生の欲動の圏内には統一性の契機となるもの、つまり広い意味での器官を担うものが見出されない以上、その条件は自我欲動 - 死の欲動の圏域に、正確に言えば生の欲動と連動する以前の純粋な死の欲動に求めざるをえないことは明らかなのである。

鍵となるのは、フロイトが自我欲動の系譜をひく欲動として（場合によってはそれと同一のものとして）死の欲動を位置づけていることである。自我欲動と性欲動の対立という二元論は、性欲動とそれを抑圧する自我の審級という対立関係から導き出されたものであり、生殖による種の保存といういわば個体の生にとってメタ・レベルにある要請に奉仕する性欲動に対して、個体に固有の生に奉仕するのが自我欲動である。このような意味での固有の生の圏内にある自我欲動に、死の欲動が塗り重ねられることは、論理としてやや奇妙にも思える。しかし、フロイトは『快感原則の彼岸』において、そこに欲動の保守性と

いう概念を導入することで自我欲動と死の欲動を接続してみせる。保守性とは、欲動がつねに以前の状態へと回帰すべく働くという原理を指している。おそらくはこの書物の中で最も有名なものであろう一節を参照し、フロイトのテーゼを確認しよう。

生命は、発展のすべての迂回路を経ながら、生命体がかつて捨て去った状態に復帰しようとしているに違いない。これまでの経験から、すべての生命体が＜内的な＞理由から死ぬ、すなわち無機的な状態に還帰するということが、例外のない法則として認められると仮定しよう。すると、すべての生命体の目標は死であると述べることができる。(Freud 1920=1996: 162)

このテーゼは、欲動をすべからく退行的なものとして捉えるものである。そしてその退行の果てに目指される欲動の目標とは死以外の何物でもない。あらゆる欲動は「無機的な状態」への還帰としての死へと向かう「迂回路」を構成しているにすぎない。この意味で死の欲動は生命体にとって最も根源的なものである。そしてそれと同一視される自我欲動とは、いわば死の欲動の個体の生のレベルでの変奏であると考えることができる。この変奏を支えるのが死の内的な理由の確保という論理であり、自我欲動は「自らに固有の方法で死のうとする」、つまり死において自我の固有性を担保することを目指すものと規定される (Freud 1920=1996: 164)。このような見地からすれば、死の欲動の導入によって先鋭化するのは、個体の生のレベルに還元されない性欲動とその他の（死の欲動に完全に奉仕している）欲動の対立である。それが自我欲動と呼ばれようが死の欲動と呼ばれようが、本質的なことは、およそ個体の生というレベルで機能するあらゆる欲動はその保守性によって死へと向かっているということである。そうした死の根源性に対して、唯一抵抗する要素があるとすれば、それは個体の生とは別のレベルで基礎づけられる欲動、すなわち性欲動だけであるということになる。フロイトは、唯一死に抵抗しうる性欲動と、死によって基礎づけられるその他の諸欲動との対立を有機体の生命にとって「脈動するリズム」のようなものであると説明している (Freud 1920=1996: 166)。

では、こうした論理を鏡像段階における欲動の統合という契機へと送り返したとき、どのような帰結が引き出されるだろうか。それを上のフロイトの言葉を引き継いで簡潔に示せば次のような表現となるだろう。すなわち、死の欲動の沈黙こそが、部分欲動がもたらす生の「リズム」を統御している、と。沈黙する死の欲動は、個体の生のレベルにおいて自我欲動の中に自らを織り込み、個体に絶えず脈動を送っている性欲動をエスの底辺から統御しているのである。ここで、鏡像段階における主体が、原初的不調和から自らを救い出す対象としての自我のイメージを獲得する際に、表象でしかない像との関係を経由すること、言い換えれば、ラカンが「自動人形」と呼んだ死の形象を通過することを想起することは決して無駄ではないだろう。そこで主体は、権利上はいかなる他人の姿とも交換可能なひとつの形象を自らのものとし、「虚像の系列の中に位置づけ」られる。この虚像は



主体の客観的な似姿ではなく、むしろ主体が錯視的に見出すものとして、その意味で当の主体にしか見えない自己のイメージとして機能する。ここまでの検討を経た本稿の理路において、この過程を、＜私＞が固有の死を確保する条件として捉えることは十分に可能なのではないだろうか。つまり、生体を苛む欲動の喧騒は、いわば死の欲動によって縁取られることで想像的自我のもとに辛うじて束ねられるのではないだろうか。そしてこのような根源的な機能を果たすことによってこそ、死の欲動は生の欲動から厳密に区別されうるのである。ここではふたつの死の契機——すなわちラカンの鏡像段階論における死の形象とフロイトの自我を貫く死の欲動——が、自我 - 対象というフォルマリズムにおいて重なり合っている。これが、ラカンの視覚空間に裏張りされたフロイトの欲動論をめぐる本稿の考察が提出するひとつの帰結である。

#### 4. ラカンの視覚空間における対象

ここまでの本稿の論旨からすれば、鏡像段階論はフロイトの欲動論（とりわけ自我と対象の関係、そこでの欲動の攻撃性と統合といったテーマ系）を洗練されたかたちで再構成するものである。ラカンの言葉に再度立ち返ればこのことは明らかである。ラカンは「人間における攻撃性という本性、およびそれと自我と諸対象というフォルマリズムとの関係」を理解すべく、それを「人間の個体が、彼を自身から疎隔してしまうひとつのイメージに固着するこのエロスの関係」として主題化していた。そこでの自我と対象の関係は、何よりも「個体が＜私＞と呼ぶことになる受難＝熱情の組織化＝器官化がその起源としている形式」であった。ラカンが鏡像段階論においてすでに、対象をめぐる問題系を何よりも自我との緊張関係を中心的な論点として捉えていたことは疑いえない。統一的な自我のイメージという対象は、主体の側にも鏡像の側にも位置づけられず、むしろ両者を欲動のエネルギーの磁場の中に引きずり込む虚焦点のようなものとして機能する。ここで主体－鏡像はそれぞれ固有性を維持した項として差し止められるものではなく、自我－対象というひとつの亀裂によって、あるいは離接的な接合（固着／疎隔の同時性）によって結び合わされている。そしてこの関係においてこそ、フロイトの死の欲動はその位置づけを明確にするのだと本稿は考える。すなわち、死の欲動（の沈黙する次元）は生の欲動を縁取るようにして潜在的な仕方を取りまとめており、そのまともなりこそが個体の固有性を基底的に支えているのだ、と。

ラカンは、このような理論的布置のうちにある対象の概念を、特に 1960 年代以降自身の理論の中心に据えることになる。それは対象 a (objet petit a) と呼ばれ、その名からしてははっきりと、本稿が参照したシェーマ L における a (moi) からその系譜を引き継ぐ概念装置である。この対象 a がラカンの理論的変遷においてその存在感を増していく過程は、ラカンの関心が象徴的なもの (le symbolique) から現実的なもの (le réel) へと移行することと軌を一にしている。対象 a は現実的なものの次元に位置づけられるものであり、これが想像的

なもの (l'imaginaire) の次元にある対象としての自我とはっきりと異なる点である。本稿では、この対象 a という概念の系譜を詳細に辿りなおす作業は別の機会に譲らざるを得ないが、この系譜が想像的な次元から現実的な次元へと滑り込んでいく必然性を簡潔に提示することで、ここまでの本稿の議論がラカンの理論構成において一定の射程を持ったものであることを確認しておきたい。そのために、ラカンの 1964 年のセミナー『精神分析の四基本概念』で展開した対象 a と視覚空間をめぐる議論に最低限の検討を加えておく。

ラカンはこのセミナーで、フロイトの表象代理 (Vorstellungsrepräsentanz) という概念に着目している。フロイト表象代理とは、欲動が心的装置の内部に関係付けられる際の媒介の様態のことを指す。この媒介が心的代理 (psychische Repräsentanz) と呼ばれるものであり、それは表象 (Vorstellung) と情動 (Affekt) とに分類される。表象代理は前者に当たる概念であり、さらに言えば、本稿が前章までの議論で扱った攻撃性は後者に対応するとみてよい。このような媒介が想定されるのは、欲動が心身の境界に位置づけられ、それ自体としては表象されないものだからである。この意味で欲動は、ラカンの理論的布置においては現実的なものの水準にある。このようにして欲動がある変換を経て心的装置に参入したものが欲望 (Wunsch, désir) である。この変換は、現実的なものとしての欲動が、象徴的なものおよび想像的なものという表象の次元で現れることだと言い換えることができる。ラカンはこの表象代理という概念の翻訳の仕方、つまりその理解の仕方に関して、それを「表象を代理するもの (représentant de la représentation)」(Lacan 1973: 243) と捉える独自の理解を示す。ではこの「表象を代理するもの」は本稿の前章までの議論とどのような関係にあるのだろうか。

それは何よりも自我における欲動の統合という命題に関わっている。拡散する性欲動が束ねられる葛藤の場としての自我の成立を、ラカンが受難＝情熱の組織化＝器官化と呼んでいたことを思い出そう。何度も繰り返してきたが、性欲動を全的に統合する組織＝器官は原理的に存在しない。ラカンはこの存在しない器官、根源的に欠如している器官にファルス (phallus) という名を与える。そして、葛藤における欲動の組織化＝器官化、あるいは分裂における欲動の統合という逆説は、そこでファルスの欠如による欲望の主体の成立として捉え直される。「表象を代理するもの」というラカンの表象代理への理解は、そのものとして表象され得ない欲動を、ひとつのものとして表象するファルスを——それが根源的に欠如しているがゆえに——代理するもの、と換言できる。そして本稿が本章で主題化する対象 a とはラカンにおいて、このファルスの欠如との関係によってこそ要請される概念なのである。

このように考えれば、欲動から欲望への変換と主体の成立はふたつの回路から記述されると言うことができる。それは現実的水準から、象徴的／想像的水準への移行である。このふたつはフロイトが心的代理に設けた表象／情動という区分に正確に対応している。そして両系列にはさらに、ファルスの欠如／攻撃性の喚起という問題系が連なることになる。本稿の前章までの議論は、概ね上の後者の問題系に比重を置いて検討したものであり、本

章の議論は前者の問題系により焦点を当てるものである。しかし自我-対象はこの両系列にまたがって考察されるべき主題であり、それをここからファルスの欠如と対象 a の (象徴的) 関係において、なおかつ (想像的) 視覚空間において標定することで、本論の結びとしたい。

ラカンによれば、「対象『a』とは、主体が自らを構成するために手放した器官としての何か」であり、「欠如の象徴、ファルスそのものではなく欠如をなすものとしてのファルスの象徴」である (Lacan 1973: 119)。これは上で示した前者の系列から捉えた対象 a の最も基本的な定義である。ラカンはそれを、主体の視覚空間における〈他者 (Autre)〉の「眼差し (regard)」として提起する (Lacan 1973: 185)。ここでラカンは、欲望の主体の成立という精神分析の基本的な主題を、視覚の主体の成立と重ねあわせているのである。眼差しとしての対象 a は、主体と〈他者〉の欲望の弁証法を視覚空間において駆動するものであると言える。ラカン理論において、〈他者〉とは主体にとってその欲望の空間そのもの、あるいは欲望する主体の存立条件そのものである<sup>14</sup>。このことを指してラカンは、「視るという水準では、(中略) 私たちは欲望の水準、〈他者〉の欲望の水準にいる」のだと述べており、この空間において「目は対象『a』として、つまり欠如 ( $-\phi$ ) の水準で、機能することができる」ものであるとしている (Lacan 1973: 119)。ここでラカンが「欠如 ( $-\phi$ )」と記しているのは、欲望する主体を支えている存在しない器官としてのファルス ( $\phi$ ) の欠如のことである。この欠如を象徴化する対象 a は、欲望する主体の視覚空間において、表象の次元における亀裂として現れる<sup>15</sup>。この欠如との関係によってこそ主体は欲望の水準に出現

---

14 ラカンの「人間の欲望とは〈他者〉の欲望である」(Lacan 1966: 814) という有名な定式は、まさしくこのように理解されるべきである。本稿は前章で性欲動を個体の生のレベルには還元されないものとして位置づけたが、ここで性欲動を統合する器官 (=ファルス) の欠如は、主体の欲望を条件づける次元、つまり主体のレベルには還元されない次元 (=〈他者〉) の相関物として機能するのである。

15 この亀裂は、ハンス・ホルバインの描いた『使節たち』における、アナモルフォーズという技法によって描き込まれた髑髏のモチーフをその具体例として説明される (Lacan 1973: 102)。ラカンによれば、アナモルフォーズとはタブローの歪んだ表象空間において、視覚の主体の欲望の空間を可視化する技法である。またラカンはこの髑髏のモチーフを、死を象徴化するものとして捉えており、対象関係における死の欲動、死の形象に着目する本稿の視点からしてもこのことは重要である。主体は現実的なもの (としての対象 a) という不可能性によってこそ支えられており、この不可能な対象を視覚的に形象化すれば、それは死を具現化するモチーフ——視覚空間において歪んだ影として現れる髑髏のモチーフ——となるのである。これは、欲動を統合する自我 (=a) をその基底において支えているものとしての死の欲動の対応物として考えることができる。こうしたことを踏まえて、前章までの議論をラカンの理論的配置に組み込むならば、以下のように言うことができる。精神分析が考える意味での主体化においては、死の欲動こそが最も根源的な欲動である。しかしこの欲動とその目標の達成、つまり根源的な満足——この満足をラカンは享楽 (jouissance) と呼ぶのだが——としての死は、現実的なものの水準に、不可能なものとして留まっている。すなわち主体にとって死はラディカルに外在化された享楽である。そして本稿が死の形象と呼んだ鏡像は、この外在化された (つまり現実的な) 死の、想像的な水準における翻訳である。そしてこれと全く同じ意味において、去勢ないしファルスの欠如は、その象

するのである。このような意味でのファルスと対象 a の関係は、ラカンによってさらに以下のように言い換えられている。

それは無化された主体以外の何物でもありません。正確に言えば、イマージュを与えられた去勢 = 「 $-\phi$ 」という形式で無化された主体です。去勢は私たちにとって、基本的な諸欲動の枠組みを介して、諸欲望の組織化 = 器官化全体の中心となるものです。(Lacan 1973 : 102)

ここでのラカンの言葉は、対象 a という概念装置が、私たちが前章まで検討してきた欲動論の問題系を引き継いで構想されたものであることをはっきりと示している。個体においてその統合性を危ぶめる部分欲動としての性欲動が、ひとつの器官において全体化することは決してない。では、それにもかかわらず、ある単位を持ったものとしての自我が機能することは、一体どのような事態によって可能となっているのだろうか。ラカンがファルスというきわめて形式的な、なおかつ私たちが経験的に捉えているような意味での性器とは全く別の器官を理論的な装置として呼び出すのは、まさにこの問いに答えるために他ならない。そしてその答えは、本稿が前章までの議論で検討してきた、自我という審級の矛盾をそのまま引き受けたものとなる。欲動をひとつの全体として統合する器官が存在しないということ、その欠如によってこそ主体は支えられている、というのがラカンによって理論的に導き出された答えである。ラカンの言う去勢とはこの存在しない器官と主体との逆説的な関係を指すものであり、対象 a はこの器官をひとつの欠如として象徴化する。対象 a が表象の次元における亀裂として現れるのは、このような意味においてである。

この操作によって、ラカンは主体の概念を独自のものとして提起することに成功している。よく知られていることだが、ラカンが考える主体は自我とは全く別のものである。ラカンの主体とは、欲望の主体以外の何ものでもない。ラカンにおける自我 / 主体の区分は、先に述べた欲動 / 欲望の区分、現実的な水準 / 象徴的・想像的な水準の区分と平行になっていると言ってよい。主体の側から見れば、現実的な欲動を統合する自我は端的に不可能なものである。そして表象の次元におけるこの不可能性こそが、欲望の空間を構成している。私たちが第一章で検討した鏡像段階論において想像的な水準で現前する自己像として考えられていた自我 a は、ここでは想像的な水準では現前し得ない現実的なものとしての対象 a として捉え直されているのである。それは主体と（本稿が死の形象として位置づけた）鏡像の間にある隔差を、対象関係の根本問題としてより洗練された仕方で捉えるための議論の深化である。上の引用で、イマージュの空間における去勢（ $-\phi$ ）が無化された主体であるとされるのは、対象 a が想像的な水準においては非現前に留まることこそが、欲望の主体の成立条件だからである。去勢すなわちファルスの欠如が、イマージュに空いた穴としての対象 a を構成し、（その穴を中心とした）表象の次元としての欲望の空間へと、

---

徴的な水準における翻訳である。

現実的な欲動を変換することの効果としてしか欲望の主体は存在しない。そしてそれゆえにこそ、その効果として欲望する主体を生み出す対象 a は「欲望の原因 (cause du désir)」であると言われるのである (Lacan 1966 : 691)。このように、対象 a はラカンの主体を構成する根源的な要素として考えられている。

## 5. 結論

1940年代の鏡像段階論において主体と鏡像の間にある隔差の相関物として示された対象の系譜は、ラカンの理論的変遷を経て、1960年代には視覚空間において主体を構成する、視覚化不可能なものがもたらす亀裂として、重要な位置を占めることになる。これまでの議論から引き出される私たちの結論は、すぐれて逆説的なものとなる。それは、ラカンの視覚空間には視覚的ではありえないもの——欲動、現実的なもの、対象 a——が描き込まれており、それこそが視覚を主題化する際のラカンの理論的布置において最も根源的な役割を担っている、ということに他ならない。ラカンにおける対象、イマージュの問題は極めて広い射程を持っており、本稿はそのごく一部を取り上げたにすぎない。しかし、それらの問題がフロイトから引き継がれた精神分析の基本的主題を考察するために不可欠なものであり、なおかつそれがラカンの理論展開の初期から、様々な変遷を経てもなおある一貫性を保ったパースペクティヴから考究されていることが理解されれば、本稿の目的は果たされたと言えるだろう。このパースペクティヴとは、自我 - 対象をひとつの緊張関係として捉えるそれである。本稿は、ラカンがフォルマリズムとして位置づけたその緊張関係を、葛藤、分裂、矛盾、不可能性といった様々な言葉を宛てながら追跡してきた。このパースペクティヴは、フロイト理論において今なおその難解さが語られる死の欲動をどう位置づけるかという問いに一定の答えを示すものであるとともに、ラカンにおける現実的なもの・象徴的なもの・想像的なものの関係、あるいはそこでの主体化といった中心的なテーマ系に密接に関わるものである。フロイトとラカンが残したディスクールの検討をさらに進めながら、このパースペクティヴをより精緻なものとすることを今後の目標として、本稿の理路を締めくくることがとする。

### 【文献】

- Freud, S, 1915, *Trieb und Tribschicksale*, *Int. Z. Psychoanal*, 3(2): 84-100 (=1996、「欲動とその運命」、竹田青嗣編、中山元訳『自我論集』、筑摩書房: 9-47) .
- Freud, S, 1920, *Jenseits des Lustprinzips*, *Internationaler Psychoanalytischer Verlag* (=1996、「快感原則の彼岸」、竹田青嗣編、中山元訳『自我論集』、筑摩書房: 113-200) .
- Freud, S, 1923, *Das Ich und das Es*, *Internationaler Psychoanalytischer Verlag* (=1996、「自我とエス」、竹田青嗣・中山元訳『自我論集』、筑摩書房: 201-272) .
- Lacan, J, 1966, *Ecrits*, *Seuil* (=1972、宮本忠雄・竹内迪也・高橋徹・佐々木孝次訳『エクリ I』、

弘文堂) (=1977、佐々木孝次・三好暁光・早水洋太郎訳『エクリⅡ』、弘文堂) (=1981、佐々木孝次・海老原英彦・葦原眷、『エクリⅢ』、弘文堂) .

Lacan, J, 1973, *Le Séminaire Livre XI, Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Edition du Seuil (=2000、小出浩之・鈴木国文・新宮一成・小川豊昭訳『精神分析の四基本概念』、岩波書店) .